

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第十五主日(9/25)礼拝

「命の言葉に生きる」

使徒言行録第七章 35節から43節

### 【聖書】

使徒言行録7:35 人々が、『だれが、お前を指導者や裁判官にしたのか』と言って拒んだこのモーセを、神は柴の中に現れた天使の手を通して、指導者また解放者としてお遣わしになったのです。36 この人がエジプトの地でも紅海でも、また四十年の間、荒れ野でも、不思議な業としるしを行って人々を導き出しました。37 このモーセがまた、イスラエルの子らにこう言いました。『神は、あなたがたの兄弟の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。』38 この人が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。39 けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い、40 アロンに言いました。『わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです。』41 彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつて楽しんでいました。42 そこで神は顔を背け、彼らが天の星を拝むままにしておかれしました。それは預言者の書にこう書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ、／お前たちは荒れ野にいた四十年の間、／わたしにいけにえと供え物を／献げたことがあったか。43 お前たちは拝むために造った偶像、／モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を／担ぎ回ったのだ。だから、わたしはお前たちを／バビロンのかなたへ移住させる。』

## 1 「この人」を見よ

ステファノが不当に逮捕され、最高法院で偽りの罪を訴えられた時、反論として行った説教、旧約聖書の物語から説き明かす長い説教を一か月にわたってみてきています。今日は、先週に引き続き、ステファノが出エジプト記を要約して語っている後半部分です。ステファノは、出エジプト記の中のモーセの姿に主イエス・キリストの在り方を見出しています。何故なら、ステファノは、直接、「モーセ」と名前を語る代わりに「この人」と三度も言っているからです。新約聖書で「この人」と言えば、イエス・キリストを示すことが殆ど。先ほど賛美した「まぶねの中に」でも、「この人を見よ」と繰り返し詠われている通りです。ステファノは、主イエス・キリストを思い起させる「この人」という言葉を使ってモーセについて語ります。

## 2 不思議な業としるし

ステファノが、「この人」と語っている一つ目は、36節、「この人がエジプトの地でも紅海でも、また四十年の間、荒れ野でも、不思議な業とするしを行って人々を導き出しました。」神はモーセをエジプト帝国に遣わし、ファラオにイスラエル解放を交渉させ、不思議な業や徴を行い、エジプトに禍をくだします。そして遂にエジプトの人びとは、イスラエルの人びとに、よそへ出て行くよう懇願し、イスラエルはエジプト帝国から脱出します。しかし、彼らがエジプトを去ったとたん、ファラオは、イスラエル追撃を命じます。奴隷の労働力を惜しんだのです。モーセ率いるイスラエルの民は、後ろはエジプト軍、前は紅海に挟まれ、万事休す。モーセは神に助けを求めて叫びをあげます。すると神はモーセに言います。「イスラエルの人びとに命じて出発させなさい。杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。しかし、わたしはエジプト人の心を頑なににするから、彼らはお前たちの後を追ってくる。そのとき、わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。わたしが栄光を現す時、エジプト人はわたしが主であることを知るようになる。」神が仰る通りになりました。このモーセへの神の言葉に、「不思議な業とするし」の意味が語られています。「わたしが主であることを知るようになる」です。わたし達人間が、真の神が生きて働いておられる、神こそこの世界の創造者であり支配者である、と知ることができるような業、それが、「不思議な業とするし」です。神とは何の関係もない魔術とは違うのです。

そして、福音書によれば、主イエス・キリストも、病気の人びとを癒したり悪霊を追い出したり、嵐や風を鎮めたりして、不思議な業と徴を行われました。何よりも、ご自身を十字架に架けて殺そうとする者の為に執り成しの祈りをしました。主イエスの愛の業こそ、「不思議な業とするし」と言えるでしょう。これらを通じ、父なる御神は生きて働いておられる、と人々が知り、主イエスが神からのまことの救い主である、と信じる事ができたのです。

### 3 生きた言葉

さて、ステファノが「この人」という言葉でモーセを語り、主イエス・キリストをも示している二番目は、38節です。「この人が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。」ここの「命の言葉」という部分、直訳は「生きた言葉」です。言葉が生きている、命を持っている、とは、どういうことでしょうか。

神は天地万物の創造者であり全知全能のお方、この世界を造られた方、全宇宙よりも大きく、私達の日や耳ではとらえることが出来ないお方です。その一方、創世記第一章と第二章では、「神はご自分にかたどって人を創造された」「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」とあります。それは、神が、わたし達人間を、ご自身の語りかけを聴き、応答する者として造られた、ご自身と対話する者として造られた、という意味があります。それは、エジプトにモーセを派遣する際にもよく表れています。モーセはエジプト

のイスラエルの民のもとに行くことを不安に思い、神に繰り返し繰り返し「自分はそんな重い役目を果たせません」と訴えます。神はモーセの言葉を聴き、彼が納得できるように丁寧に説得し計らいます。全知全能の神は、わたし達被造物と対話してくださる、様々な状況に応じて、やり方を変えてくださる、対話的なお方だ、と聖書は語るのです。聖書の神が、「人格的神」と言われる理由がここににあります。

ですから、ここでの「命の言葉」、「生きた言葉」は、その都度その都度行われる神との対話、祈りのうちに私達が聴く神の言葉だと言えるのではないのでしょうか。この命の言葉を求めて、モーセも主イエスも主なる神、父なる神に祈り続け、対話し続けました。

#### 4 神に叛き続けた民

ですが、イスラエルの民は、違いました。今日の聖書にあるように、人々は、荒れ野での不自由が続くと、「神よ、何故ですか」と尋ね、助けを求める前に、奴隷として家畜のように酷使されていたエジプトを懐かしみます。エジプトの富をもたらす、と信じられていたエジプトの神々に心を向け、遂には、神を自分達で造ることまでします。神はこの事を深く悲しみ怒り、イスラエルは荒れ野を四十年彷徨うこととなります。

では、荒れ野の四十年を経て入った約束の地カナンで、人々は神の口から出る命の言葉を求めて生きたのでしょうか。そうはなりません。42節、預言者の言葉としてステファノが語る通りです。『イスラエルの家よ、／お前たちは荒れ野にいた四十年の間、／わたしにいけにえと供え物を／献げたことがあったか。お前たちは拝むために造った偶像、／モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を／担ぎ回ったのだ。だから、わたしはお前たちを／バビロンのかなたへ移住させる。』これは、出エジプトの出来事から数百年後、紀元前8世紀、アッシリアに滅ぼされる直前の北イスラエル王国の預言者アモスの言葉の引用です。「荒野にいた四十年」とありますが、実際はそれより数百年後の紀元前8世紀の北王国の現実が語られています。北王国は経済が発展し豊かになるにつれて、この世の繁栄を約束する異教の神々を拝むようになります。モレク神やライファンもその一部。イスラエルの民は、モレク神に人身御供として子どもを捧げたと伝えられます。聖書の神は、子どもの命を犠牲にしてまで繁栄を求める人身御供を忌み嫌われます。「ライファンの星」というのは、バビロニア帝国で拝まれていた土星の神だそうです。

そして、最後の『だから、わたしはお前たちを／バビロンのかなたへ移住させる。』アモス書の原文では、ここは「アッシリアのかなた」です。北王国がアッシリアに滅ぼされ、人々は連れ去られる、という預言です。しかし、ステファノは『アッシリアの彼方に移住させる』を『バビロンのかなたへ移住させる』と言いかえました。何故でしょうか。ステファノを嘘偽りの証言で訴え、神を神としないエルサレムの最高法院の権力者達こそ、バビロンにとらえられて行った南ユダ王国の子孫だからです。「あなた達の先祖は、神を神とせず不信のかぎりをつくしたので、バビロンに捕虜として引いていかれた。あなた方は、あなた方の先祖と同じことを

しているのではないか」ステファノは、イスラエルの背信を鋭く告発しているのです。

このステファノの指摘は正しいものでした。バビロン捕囚から500年以上経ったステファノの時代にあっても、イスラエルの民、特にエルサレムの指導者達は、命の言葉なる神のみ言葉を求めて生きようとしませんでした。38節「この人が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。」この一文は、荒れ野でモーセを通じ、民に律法が授けられたことを言っています。ここでの「命の言葉」、モーセが神のみ使いから受けて伝えた言葉は、具体的には十戒をはじめとした律法です。律法は、人々を神の民として生かす、神から与えられた命の言葉でありました。しかし、主イエスの時代、イスラエルの人びとは「命の言葉」を「死んだ言葉」としていたのです。律法は本来、神の一方的な約束で救われた結果、与えられたもの、救う神と救われた神の民との間、神の民同士の間、神の民同士の間の秩序を定めたものです。ですが、救いの結果与えられた律法を、彼らは、「律法を守れば、救われる」と誤って受け取り、救いの条件としてしまいました。神を求めなくても、表面的に律法さえ守れば救われる、律法を、自力で守るべき戒めとしまったイスラエルの人びと。様々な状況に応じて律法を些細なレベルまで細分化し、精密に定め、厳密に守ろうとしていました。その結果、天の御神が、その時に応じてこの上なく大胆に自由に働かれ、不思議な業と徴を行われることを忘れしました。ダイナミックに語りかけてくださる生きた言葉を狭くて偏った人間の考えに閉じ込め、生き生きとした命の言葉の力を奪い、死んだ言葉としてしまいました。

その姿は福音書のファリサイ人や律法学者の姿に描かれています。安息日に主が病を負って苦しんでいる人を癒せば、「安息日規定の律法を破った」と主を罪びととして追及します。彼らは、そうして、律法の基本であり目的でもある神の義なる愛を蔑ろにしていることに気が付きません。自分達はその都度その都度、新たに、神を神として求めることをしないばかりでなく、人々をも命の言葉から遠ざけました。主イエスは、この事を深く悲しまれ、彼らの過ちを指摘して悔い改めを迫ります。ですが、指導者達は主イエスを憎み、遂には主を殺してしまうのです。ステファノが、「けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思った」とモーセについて語った言葉は、三度目の「この人」であり、主イエスを指し示すものでした。

しかし、神の言葉を死んだ言葉とし、神を殺して自分達が神となろうとするのは、荒れ野のイスラエルやユダヤの指導者達だけではありません。わたし達キリスト者も彼らと本質は同じだと思えます。神を神とできず自分達を神とするアダムとエバの子孫だ、とつくづく思います。祈り求めることなく、相手の立場を想像する事もなく、聖書の言葉で人を裁いてしまうことのなんと多いことでしょうか。人間の作った決まりに固執し、目の前の小さくされている人々に無関心になることもあります。神に祈るよりは、この世のはやりの考えや思想によって判断する事もあります。自分達こそ正義だ、と異なる人々を暴力でやっつける事も度々行われています。教会の歴史を見てみれば、キリスト者が如何に主イエスを十字架に架けた人びととよく似ているかが分かります。

ですが、そのような私達であっても、いえ、そのような私たちであるからこそ、主イエス・キリストは十字架に架かってわたし達の罪を贖ってくださったのです。その主イエスを正しい、として神は三日目に甦らせてくださいました。この主イエス・キリストが今も生きて働き、わたし達に、教会に、聖霊なる御神を注いでくださるからこそ、わたし達は、教会は、主イエス・キリストの十字架に立ち帰り、悔い改めて又新しく始めることができます。神を求め、神からの命の言葉に生きることができるのです。

## 5 命の言葉に生きるとは

では、神と対話して生きる、命の言葉を聴くとは、具体的にどういうことでしょうか。恐山のイタコの口寄せのように霊界に住む人々の言葉を聴くものではありません。この世を生きるための言葉を、聖書を通して聴くのです。自分を低く小さくし、神を大きくして崇め、神を礼拝し、神を求めて、主イエス・キリストのみ名を通して祈りつつ聖書を読む、「私を生かす命の言葉を聴かせてください」と祈りながら読む。その時、今の自分に最も必要な言葉、自分を生かす言葉を聴く、そういうことが、実にしばしばあります。聖書とは、まさにわたし達を生かす命の言葉の詰まった愛の手紙です。しかも、一度読んだらそれでおしまいの手紙ではありません。人生のその都度、その都度、新たに新しい命の言葉を語りかけて来る手紙なのです。

しかし、聖書を読み、命のみ言葉を聴いただけでは、言葉の内にある命の力は失われてしまいます。主イエスはかつて次のように言われました。「わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを行う人が皆、どんな人に似ているかを示そう。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。洪水になって川の水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、揺り動かすことができなかつた。しかし、聞いても行わない者は、土台なしで地面に家を建てた人に似ている。川の水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、その壊れ方がひどかった。」(ルカ6:46～49) 命の言葉は、わたし達が実践しようとしてこそ、そこに生きようとしてこそ、真実の力を奮い、わたし達の命をイエス・キリストという揺るぎない土台の上に建て上げることとなるのです。

しかし、わたし達が主イエスの言葉を実行するのは、神の憐みと御力なくしては出来ることではありません。ですから、私達は、「我が主イエス・キリストよ、我を憐れみたまえ」と祈り、命の言葉を実行できる聖霊の御力を祈り求めます。改革者・カルヴァンが始めた礼拝式にも、この真理を見ることができます。私たちナザレン教会の習慣にはありませんが、カルヴァンの伝統を引き継ぐ改革派教会の礼拝では、モーセがシナイ山で受け取った十戒を礼拝中に読み上げる教会があります。カルヴァンが指導していたジュネーブの教会では、十戒の一つ一つの戒めを読み上げる時に、必ず、「キリエ、エ、レイソン。主よ、憐れんでくださ

い」と祈ったそうです。「私の他に神があってはならない」と第一戒めを読み上げた後に「主よ、私を憐れんでください。」と祈り、次の第二戒めを読み上げ、また「主よ、私を憐れんでください」と祈る、これを第十戒まで繰り返すのです。神の憐みと助けなしでは、戒めを守り、命の言葉を実践することなどできない自分達であることを深く自覚し、祈るのです。このように、主の教え、命の言葉を実践すべく神の憐みと御力を祈り求めて生きていく時、主の教えは、その人を真実に生かす命の言葉の力を奮うのではないのでしょうか。神が生きて働かれ自分を愛し救おうとされていることが分かるから、神の愛が注がれていることを実感できるから。ですから、主イエスの命の言葉に生きる者こそ、不思議な業と徴、と言えます。わたし達は、このように神を求めて生き、命の言葉に養われ、この地上にあっても、神の子として終わりの時の命、天国の命を生きる者へと成長していくのです。神を殺そうという者達に、このような聖なる愛を注いでくださる父なる御神と主なるキリスト・イエス、聖霊なる御神を賛美せずにはおられません。